

博士（文 学） 金 惠 鎮

学 位 論 文 題 名

日本語と韓国語のボイスの対照研究

－現代韓国語における「二重形」の位置づけを中心に－

学位論文内容の要旨

本論文は以下の 6 章から構成されている。

第一章「序章」では、本論文の目的、研究対象と方法、さらにボイスの定義について触れている。

第二章では、韓国語の受動態構文で重要な役割を果たす接辞「i,hi,ri,ki」、接辞「(e)ji」そして、この両方の接辞が同時に結合する、いわゆる「二重形」について触れている。さらに、接辞「i,hi,ri,ki」が自動詞から他動詞を派生、他動詞から自動詞を派生、あるいは受動形、使役形を派生する等、種々の機能を有していることに触れ、同時に、その複数の機能のうち「自動詞」としての機能がもっとも優勢であることを指摘している。

続いて、現代韓国語における基礎的な他動詞 305 個（自他両用動詞 3 個を含む）をとりあげ、その分布を詳細に調査した。その結果以下のことが判明した。

- 接辞「i,hi,ri,ki」、接辞「(e)ji」、「二重形」の三つの形式を取るもの（全体の 38%に当たる 115 個）

被害あるいは行為者が特定される典型的な受動文の場合は「二重形」がもっとも自然なもので、接辞「i,hi,ri,ki」のほうはどうちらかと言うと「主語が抽象的なもの、不特定多数の行為者による一般的な状況を説明する場合」について使用されることが多いこと、つまり「特定の行為者を意味的に前提としない」という意味で自動詞文に近接していること。

また、この場合の接辞「(e)ji」は受身を表すことはなく「自発」「可能」を表していること。

- 接辞「i,hi,ri,ki」と接辞「(e)ji」の二つの形式を取るもの（4 個）

これには再帰的な動詞が属し、接辞「i,hi,ri,ki」が付いたものは自動詞的に働き、接辞「(e)ji」が付いたものは「自発」の意味を表わしていること。

- 接辞「(e)ji」しか付かないもの

- (a) (約 60 パーセントに当たる 177 個)

この場合、受身を表すのが一般的であるが、他動性の低い動詞や知覚・思考動詞はしばしば「自然に、ひとりでに」などの副詞と共に起して「自発」を表すことが多いこと。

- (b) 自他両用動詞（3 個）

この場合、他動詞の意味と結合し「自発」を表わす。

4. 接辞「i,hi,ri,ki」しか付かないもの（5個）

これは受身を表しているようであるが、詳しい調査はこれからである。

第三章では、日本語と韓国語で能動文と受動文がどのような頻度で現れるかについて、三浦綾子著『氷点』の翻訳書(2003年)を分析している。その結果、従来韓国語では受動表現より能動表現を好んで使用すると言っていたが、現代韓国語においては受動表現が幅広く現れていることを指摘している。ちなみに、日本語の受動表現 585例（漢語+されるを除く）のうち、韓国語においても受動表現になっているものは 402例で、全体の約70%にも及んでいる。しかも、前述の接辞「i,hi,ri,ki」接辞「(e)ji」以外に「二重形」を使用した例も若干見えることがわかった。

第四章では、日本語と韓国語の使役構文について考察する。まず、韓国語の使役構文には接辞「i,hi,ri,ki」を使用するものと、日本語の「するようをする」に当たる分析的な形式「ke hada」を使用するものの二つがあるが、前者の接辞「i,hi,ri,ki」を付けるものは辞書には14個しか登録されておらず、必ずしも「使役」を表すことがこの接辞の主要な機能ではないことを指摘した。

また、日本語の「～させる」使役構文は被使役者の行為の結果まで含意しているのが普通であるのに対し、韓国語の使役構文は接辞「i,hi,ri,ki」によるものは被使役者の行為の結果まで含意するが、分析的な「ke hada」構文は行為の結果までは含意していないことを明らかにした。

また、日本語の使役構文は「被使役者にある行為をするように命令・許可・放任」を意味するが、韓国語の使役構文は、接辞「i,hi,ri,ki」によるものの多くが「被使役者に対する直接的な行為」を表すのに対し、分析的な「ke hada」構文は主に「被使役者に対する間接的な行為、つまり勧告・依頼」を表し、使役性がそれだけ薄らいでいるとした。

第五章では、日本語においては「～させられる」という使役・受動文が存在し、それは「無理に食べさせられる」のような「強制的使役」と「感じさせられる」のような「誘発+自発」を表わすが、実例としては後者の「誘発+自発」の例がはるかに多いとも言われている。一方、韓国語においてはこれまで使役・受動文は存在しないと言われてきたものである。しかし、調査の結果「二重形」が「強制的使役」を表わすと思われる「使役・受動文」が存在していることが確認された。

第六章では、「自発表現」を「主体の非意志、外的条件により実現できるもの」と定義すると、韓国語にも日本語同様「自発表現」があること、しかもその例が少なくないことを指摘している。しかも、韓国語における「自発表現」の中には、「思う」「感じる」などの知覚・思考動詞以外の動詞にも数多く存在していることについても触れている。

学位論文審査の要旨

主　査　教　授　門　脇　誠　一(言語文学専攻言語情報学講座)

副　査　教　授　小　野　芳　彦(言語文学専攻言語情報学講座)

副　査　教　授　津　曲　敏　郎

(歴史地域文化学専攻北方文化論講座)

学位論文題名

日本語と韓国語のボイスの対照研究

—現代韓国語における「二重形」の位置づけを中心に—

本論文は現代韓国語のボイスの体系について、現代日本語のボイスの体系とも関連させつつ、韓国語に新たに出現した「二重形」と呼ばれる形式の意味的・統語的・形態的用法を明らかにし、その「二重形」を韓国語のボイス体系全体へ正当に位置づけることによって、現代韓国語のボイス体系全体を解明することを試みようとしたものである。

従来、この「二重形」は多くの研究者から誤用として扱われ、特に韓国内の研究者の間からは、極端な場合は、「國語（韓国語）純化次元からすれば排斥すべき対象である」とまで言われ、積極的に取り上げられてこなかったものである。しかし、今回の氏の調査によって基本的な他動詞のほぼ 40%にこの「二重形」が使われることが実証され、単純に誤用と片付けることはできないものであることが指摘されている。このことはソウル在住の 30 代の人 10 人を対象に行ったアンケート調査でも同様の結果が出ていることからも裏づけされる。

氏の論文の成果また評価できる点を要約すれば以下のとおりである。

①本論文は、現代韓国語に新たに出現した、これまで誤用として扱われてきた「二重形」と言われる形式が、かなり明瞭な機能を有していることを明らかにして、韓国語のボイス体系に正当に位置づけた点。

②接辞「i, hi, ri, ki」にいくつもの機能があるが、その中でも「自動詞化」の機能がもっとも優勢であることを指摘した点。このことは、従来言われてきたこの形式の持つ「受動態」を表す機能が薄れてきていることを意味しており、したがって被害あるいは行為者が特定される典型的な受動文を作るためには、さらに接辞「(ə)ji」を結合した「二重形」を出現させる必要があった。そして、このことは機能を分化させる方向に進んでいることを予想させるものであり、重要な指摘である。

③日本語同様韓国語においても「自発」表現が頻繁に現れていることを指摘した点、また、「使役受動表現」も萌芽的ではあるが現れていることを初めて指摘した点、等である。

審査の過程において、論文の構成、文章表現などに関し改善すべき点がいくつか指摘されたが、当委員会は、本論文が博士（文学）を授与するに十分値する学問的価値を持つものと全員一致して認めるものである。